

抑留中作業 測量の助手、製材工場、煉瓦工場、建

築、水道工事、自動車工場の建設など

に従事

帰国後 昭和二十四年十二月二十日頃、警察官に

復職

昭和五十年三月三十一日付をもって円満

退職

(新潟県 中村 甲)

私の青春と抑留記

新潟県 松井 徹

まず、この手記を書く前にお断りしておくことは、すでに数版発行された『平和の礎』の中で、抑留者の方々のシベリアでの労苦、重労働、加えて食糧不足等々、収容所により大同小異、ほとんど語り尽くされていると思われるので、その点は大部分を省略して、角度を変えた視点から拙文をまとめてみました。

私は昭和十六年六月、徴用令により舞鶴海軍工廠造船部に配属された。ここは駆逐艦の新造を主として、加えて修理といった工場だった。その中で新造船に係わる事務部だったので、関係機関から来る新造艦の製造命令は全部手にとるように分かる部署で、当時とすれば極秘中の極秘だった。

新造船が完成すると日の丸の旗で進水を祝い、艤装工事が終わると船影はなく、多分南方に向かったのかなと想像していた。

二、三カ月たって、横腹にコンクリートで応急修理してドックに入っていた姿を見ては、事の悪化を自分なりに想像していた一時代だった。

昭和十七年十二月二十五日、徴用が解除されるや、十八年一月十日、現役にて千葉県市川市国府台野戦重砲兵第一〇一三部隊に入隊。一期検閲(三カ月間)の教育を受け、終わると即満州牡丹江省石門子に配属される。その時点ではすでに戦運悪化して、本隊の待つニューギニアに行く予定が海上封鎖され、陸路輸送も寸断され、石門子に待機中に「本隊玉粹」との悲報を

受け取り、即転属要員となり、親しかった戦友諸氏とも三々五々、十九年秋、チチハルの独立中隊に転属を命ぜられ、またそこで二度目の初年兵教育(?)を受ける。

そのころチチハルはソ連の制空権下にあり、再三空爆されるのを郊外から見ている。

戦運悪化は、中隊幹部には状況判断ができていたのだろう。ある日、私と初年兵二人は中隊長に呼ばれ、「実は家族を内地に送り届けなければならぬが、手元人員も少ないので君たち三人でその任務を遂行してくれ」との命令。家族は婦女子、子供とも十五、六人だったと思う。家族と君たちの食糧及び被服は二年分は十分に用意してあると、五十トン貨車の下に敷き詰め、その上で生活ができるように用意されており、「南下する列車が用意でき次第連結して出発するから、くれぐれも成功を祈る、よろしく頼む」と中隊長に握手されたとき、その責任の重大さに体は硬直するばかり。

そのとき私に渡されたのがピストル一丁と実弾十

発、他の二人は小銃と実弾三十発。目的は、万一家族がソ連兵の手にかかるような事態が起きたら、今渡した銃で君たちの手で葬ってくれと、これまたビックリ、返す言葉もなく受け取ったような気がした。今でもそのときの様子が思い浮かぶ。

家族構成も、年配の方から近々出産予定の若妻等々、手帳に住所、氏名、年令まで全部記入していたのだが……。

再度出発の命が出たが、何分ソ連の指揮下になっており、鉄道も意の如く運行されない。

八月十一日、ようやく列車が発車し車中生活が始まり、我が身より家族の体調等が心配で一睡もできぬありさま。三日目になると名もない駅でストップ。調べてみたら、これ以上南下できぬと宣告され、この地で武装解除するとの命令でしたが、同行の家族が、こんな所で降ろされるのなら主人のいるチチハルに帰りたいとの要望が強く、再三交渉の結果、枕木運搬用の無蓋車なら北に行く列車が近く発車するとのことで、やむなく食糧等積んだ車両を放棄して無蓋車に乗り込

む。そのとき支給されたものは毛布が各自に一枚。雨をしのぎながらまた元のチチハルへ到着。

待っていたのはマンドリン（連続七〇発発射の小銃）を持ったソ連兵。身に付けている物すべて「ダワイダワイ」で、着ているもの以外すべて没収され、大事な手帳まで取り上げられる始末。引率ご家族の名簿も取り上げられたのが一番残念でした。

チチハルで民間人と軍人の収容先が分かれ、そのまま音信不通。ただ後日、妊婦さんが無事出産されたことを聞き、当時としては朗報だった。

チチハル収容所では約一カ月、ソ連兵の「東京ダモイ」の号令で駅まで行進。道路の両側で日本人婦女子が並んで「一緒に連れて行ってくれ」と両手両足にすがりつき泣き叫ぶ。するとソ連兵が近づき、例のマンドリンでおどかし引き離し、阿鼻叫喚の修羅場が続く。駅までついてきた親子の悲壮な顔が今でも時々思い出される。つい最近の出来事のような気がする。

また、年数回の残留孤児の肉親捜しで来日した人たちも、当時は二、三歳の子供たちだったかと思うと、

テレビを見るたびに当時は走馬灯のように思い出され、心が沈むようです。

我々が送られた所はバム鉄道の建設基地と分かった。チチハルから六十二キロメートルくらい入ったネーブルスカヤの手前の収容所。三千人くらいだったろうか。そこから奥地へ奥地へと転進させられると、また後から入ってくるという毎日だった。

食糧と言えは、いずこも同じこと、二百グラムの黒パンと大豆の塩ゆでスープ、これが育ち盛りの一日の命綱。

ある日、米が配給になるとの報に大歓声を上げて喜んだのも束の間、脱穀しただけの米だった。日本人の器用さはこのとき始まった。山から松の丸太を切り出し、昔で言う挽き臼を作って白米に仕上げ、白米が配給されたときは涙が止まらなかった。ソ連兵も感心して啞然としていたのが思い出される。

基地勤務のためカム鉄道が竣工したためか、東京ダモイする者が目立つようになり、うらやましく見送ったものだ。ソ連兵でも親切な人がいた。名前は

ミッシェル。彼はよく情報を知らせてくれた。必ず東京ダモイできるから健康に注意するようにと、よく食糧品やタバコの差し入れをしてくれたことがあった。

収容所も日に日に少なくなり、最後は十五、六人となった。ある日突然、東京ダモイの命あり。前記ミッシェルがウオツカを持ってきて、別れの乾杯をしたという懐かしい思い出もある。

ダモイの車中、バイカル湖の静かな湖は、帰れる喜びとともに一層美しく見えた。

指折り数えると四年間、長い旅だった。

ナホトカから恵山丸に乗船。舞鶴での消毒には参った。

終わりに、自分たちだけではできぬことがたくさんあることを思うとき、シベリアの地で所在すら不明の諸氏のことを、ただただ御冥福を祈るだけの微力しかないことをお許しいただきたい。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十一年六月八日

入隊 昭和十八年一月十日

入ソ 昭和二十年十月

抑留地 タイシエット、バム

作業 鉄道建設

引揚げ 昭和二十四年九月十日

引揚船 恵山丸

上陸地 舞鶴

現在

一、財団法人 全国強制抑留者協会評議員

一、財団法人 全国強制抑留者協会新潟支部監事

一、全抑協新潟県中越地区協議会、長岡支部長

(新潟県 大塚 茂)